

知中論

理不尽な国の7つの論理

安田峰俊

反中・嫌中を乗り越えろ!

- 1 覇権主義
- 2 尖閣問題
- 3 反日デモ
- 4 靖国問題
- 5 チベット・ウイグル
- 6 習近平
- 7 日本人の対中感情

星海社新書
SEIKAISHA SHINSHO

3周年

漫画：孫向文



知中論

理不尽な国の7つの論理

安田峰俊

星海社

54



中国は「悪い国」

現代の日本で最も嫌われている国はどこでしょうか。

それは中国です。

各新聞社や言論NPOなどの世論調査では、二〇一四年現在の日本の対中好感度はおおむね五〇〜一〇パーセント程度にとどまります。これはもうひとつの「嫌われ者」韓国への好感度よりも一〇パーセント以上も低く、ネガティブな印象が目立ちます。

確かに、そんな結果が出るのも仕方ない部分はあるでしょう。

韓国の場合は、一般的に「反日的」だとみなされがちな点と竹島問題や歴史問題などを除けば、日本にとってそこまで「悪い国」ではありません。同じ民主主義国なので、政治的な価値観も似ています。韓国が日本に本気で侵略戦争を仕掛けてくる可能性も、まとも

に常識を持つ人ならば一笑に付していいレベルの話にとどまります。

しかし、近年の中国は日本にとって明らかに「悪い国」に思えます。

軍拡いちじるしい核保有国である彼らは、尖閣諸島に対する明らかな領土的野心を持ち、しかも外交関係がこじれると反日デモを起こして日系のスーパーや工場を焼き討ちしてきます。政治的にも事実上の一党独裁体制を敷いているので、彼らが腹の底では何を考えているのかもよくわかりません。さらに少数民族の民族運動や民主化活動家への暴力的な弾圧など、国家体制を維持するためには人間の尊厳なんかカケラも重視していなさそうに見える点も、やはり不気味です。

また、どこまで具体的な影響があるかは不明ながら、いわゆる「食の安全」問題や、越境大気汚染の問題なども、日本人にとっての危険が大きそうで不安です。

ところが、中国は経済面ではGDP世界第二位の大国で、日本にとっても貿易面では最大のお得意先です。近年はビジネス面での「中国離れ」が進んでいるとはいえ、一四億人の市場と労働力はいまなお魅力的に見えます。

私たち日本人はなにも悪くないように思えるのに、**理不尽な理由で日本をいじめてくるイヤなやつ**。しかし、**図体がでかくてカネ持ちなので**（しかも日本よりも強いかもしれない）、

内心ではハラワタが煮えくり返っていても付き合わざるを得ない——。

それが近年の日本人の目から見た、中国のいつわらざる姿です。

嫌われる条件はことごとく揃っていると言えるでしょう。

そのため、近年の日本では中国叩き論が大はやりです。

保守的傾向が強い『産経新聞』や『週刊文春』『週刊新潮』あたりが中国をケチヨンケチヨンにこき下ろすのはもちろん、一般の新聞やテレビでもネガティブな話が目立ちます。

書店の中国本コーナーはもつと強烈です。無作為にタイトルを抽出してみましよう。

『悪中論』、『犯中韓論』、『日本を恐れ、妬み続ける中国』、『ヤバイ中国』、『嘘だらけの日中近現代史』、『中国人は雑巾と布巾の区別ができない』、『なぜ中国はこんなにも世界で嫌われるのか』、『中国人韓国人にはなぜ「心」がないのか』、『なぜ中国人にはもう1%も未来がないのか』——。

なんだか字面を眺めるだけで血圧が上がりそうです。

こうした書籍が流行する理由は、「中国（もしくは中国人）はなぜ〇〇なのか？」という

タイトルが多い点からも明らかです。

現代の日本人は、ひどいことばかりを理不尽に繰り返す中国が、一体どんな理由であんなに「悪い国」でいられるかという疑問に対する、明確な答えがほしいと考えています。

もちろん、メディア（中国や米・英・仏各国などのメディアの日本語版も含みます）の報道や論説を注意深くチェックしたり、アカデミックな論文や研究書を集中して読み込めば、その答えらしきものをつかむこともできます。しかし、多忙な現代社会においてここまでできる余裕を持つ人はそうそう多くはありません。

私たちはみんな、簡単な方法で答えに近づきたいと考えています。

これに日頃の中国の振る舞いに対する（日本社会の現状に対しても知れませんが）うつぶんが加わることで、辛辣かつシンプルに「答え」を提示してスカッとさせられる中国叩き本への需要が大いに高まっているというわけなのです。

（ちなみに私自身、過去に知人に頼まれて原稿を書いたら『アホでマヌケな中国』という題名の文庫本に収録されてしまったことがあります。また、本書の漫画を担当する孫向文氏のデビュー作も『中国のヤバい正体』です。現在の日本の出版業界でメシを食う人間が中国を論じる場合に、

この手のアプローチと完全に無縁で仕事をするのはかなり難しいという事実を、自戒を込めてここに記しておきます。

「バカ」と「悪」という最強の論理

実際にこうした本を手にしてみると、著者や書籍ごとのクオリティの差異はあるものの、記述は事実を踏まえており、勉強になることも少なくありません。

ただし、冒頭の問題提起と最後の結論が「彼らはバカで劣っているから」とか「もともと残虐で不誠実だから」とか「本質的に『悪』だから」というシンプルな主張で貫ぬかれている、という特徴を持っています。

確かに、中国は数千年の歴史と日本の一〇倍以上の人口と世界有数の国土面積を持つ国なので、「バカ」や「残虐」「不誠実」を証明する壮絶なエピソードには事欠きません。個々の論証材料が事実であるかぎり、こうして導かれる結論は論理的にも破綻しませんし、主張として尊重するべき部分もあります。

しかし、そればかりの結論でいいかと言えば、話は別でしょう。

やや不謹慎なたとえですが、仮に日本でショッキングな人災事故が起きたとします。

事故が発生した理由を「当事者がバカだから」「もともと悪いやつだから」と答えるのは、考察として間違いではありません。

さらに当事者の日常的な言動や過去の経歴から「バカ」や「悪」を論証する事例（人間は生きている以上、なにかしらバカなことや悪いことをしています）を探して積み上げれば、この主張はさらに強化できます。「バカだから」「悪いから」というのは、**人間社会のあらゆる問題の発生理由について明確な根拠をもとに説明できる、最強の論理**なのです。

しかし、なんでもかんでも「バカ」と「悪」で断じてしまつては、再発への防止策も取れなければ、私たちが身に置き換えて問題を見つめることもできません。

もしかすると、事故の背景には二〇〇五年の福知山線脱線事故ふくちやまのように、当事者が属した組織のパワハラ体質のようなもつと深い要因があるかもしれません。また、翌年に京都府の中年男性が経済的困窮と介護疲れから認知症の実母を殺害した事件のように、当事者を一方的に断罪するには酷な事情があったのかもしれない（事実、この事件では執行猶予つきの温情判決が出ました）。

さらに、過去の日本にとっての太平洋戦争（大東亜戦争）のように、傍目には間違いなく「バカ」で「悪」の行為に見えても、そうならざるを得なかった国際情勢や国民の事情や国家の内在論理が背後にあるケースだって、人間の社会にはあり得るのです。

当事者の背後事情や内在論理を調べて「バカ」と「悪」以外の理由をなんとかして提示していくのが、社会問題を解説する際のより誠実な姿勢であると言えます。

少なくとも、そちらの方が読者にとっても読んで楽しいし、視野も広がるでしょう。これは日本の社会問題だけではなく、中国についても同様であるはずです。

理不尽な国の内在論理

そろそろ自己紹介をしておきます。私は中国事情を専門にするフリーランスのルポライター（ノンフィクション作家）です。

普段は雑誌の記事を書いたり本を書いたり、取材のために中国に行ったりしています。台湾やウイグル問題などについてジャーナリストティックな現地取材もする一方で、日系企

業の在中駐在員のルポや中国のB級ニュース紹介など、あまり政治的な傾向が強くない仕事を多く請け負っているのが特徴です。

ほか、多摩大学で「現代中国入門」と「中国語」の講義も担当しています。

これはライターの仕事をきっかけに声を掛けてもらったものなので、私はいわゆる「学者」ではありません。ただ、以前に大学院にいたころに中国の近現代史を専攻していたため、私は人文科学的な視点から中国を眺めることを好んでいます。

そんな私が昨今の中国の内在論理や諸問題の背景について解説するのがこの本です。おそらく、中国の近現代史や伝統文化に立脚して話を進めることが多いでしょう。

先におことわりを言っておけば、この本はビジネス書ではないため、読んだ次の日にお金が儲かるわけではありません。また、新聞やテレビのニュース解説のように、個々の事件の実態を詳細に報じる内容でもありません。

ただし、**昨今の反日デモや尖閣問題や、習近平政権の政治姿勢や少数民族問題が、本質的にどういう文脈を背景にした問題なのか、その肌感覚を理解できるように書いています。**

社会科や理科の時間の「資料集」よろしく、中国問題を見るときのサイドストーリーを

提供していると考えてください。

(ちなみに、日本人の私の視点だけではなく、現代中国の庶民の視点を知ってもらう手がかりとして、中国人漫画家の孫向文さんに漫画を描いてもらっています。私の主張と孫さんの主張は、必ずしも一致しているとは限りません)。

「すぐ役に立つことは、すぐ役に立たなくなる」

今上天皇のご教育係を務めた経済学者・小泉信三が残した有名な言葉です。

本書もまた、すぐには役に立ちません。

ただし、今後あらたに中国が「理不尽」な振る舞いを見せたときに、それを理不尽と感じなくなる眺め方がわかるようになります。

それではページをめくってみてください。

安田峰俊

目次

まえがき 3

中国は「悪い国」 3

「バカ」と「悪」という最強の論理 7

理不尽な国の内在論理 9

第一章 中国はなぜ『覇権主義』になったのか？ 21

南シナ海波高し 22

中華皇帝は全宇宙の支配者である 24

『閩金ウシジマくん』状態へのトラウマ 30

いじめられっこ意識で国家形成 34

「自衛のために」で日本を侵略？ 39

中国の「覇権主義」は日本よりも一二〇年遅れてやって来た？ 41

〔漫画〕 中国のヤバくない日常

第一話 中国人の領土意識 45

第二章 尖閣諸島は誰のものか？ 49

日中間の最大の問題に「なってしまった」尖閣問題 50

お騒がせ船長は何者だったのか 55

尖閣にやってくる漁民たちの地元はこんな場所だ 56

村同士の戦争「械闘」 59

問題は腕つぶしで解決する。自力救済社会の伝統 62

「海民」の目から見た尖閣諸島 67

前近代の論理を利用する中国 71

〔漫画〕 中国のヤバくない日常

第二話 「反日と中国人」 75

第三章

反日デモは今後も起きるのか 79

反日デモの背景には一体何があるのか？ 80

中国の過去を知れば反日デモがわかる 83

張飛のように暴れたい中国の大衆 87

孫悟空を飼い馴らした毛沢東 91

外交カードとしての排外運動を覚えた中国 94

中国人の不誠実な「反日感情」 96

〔漫画〕中国のヤバくない日常

第三話 靖国参拝はどう見える？ 101

第四章

習近平は何者なのか 105

「祖法」を守る中国の国家体制 106

嫌われ者の実態 108

「悪の大魔王」習近平 VS 「百嬢の王」周永康 110

『24時間テレビ』と習近平の共通点 113

「演出される名君」という伝統 118

専制体制だからポピュリズムが必要 121

権力闘争を「善と悪」の対立に変えるマジック 123

習近平体制の弱点は何か 125

漫画 中国のヤバくない日常

第四話 中国国民から見た経済事情 123

第五章 靖国参拝はなぜ非難されるのか 133

大きな摩擦を引き起こす靖国参拝問題 134

尖閣はOKで靖国はNG? 137

死してなお許されない秦檜しんかいと汪兆銘おうちようめい 142

相手が死んだら敵でも祀るニッポン 146

第六章

少数民族問題はなぜ激化しているのか

165

靖国神社をどういう施設だと位置付けるか 149

中国人の理解を得ることは難しい 152

靖国にまとりつづく負のイメージ 154

靖国参拝と現実主義 158

漫画 中国のヤバくない日常

第五話 習近平とネット統制 161

人口一〇〇〇万人でも「少数」民族 166

チベット人は自焚^{じふん}し、ウイグル人は暴発する 168

清朝の臣民と、中華人民共和国の人民は異なる 173

中国共産党は何も考えていなかった 177

少数民族が「差別されなかった」時代 180

愛国主義と改革開放政策がもたらしたもの 184

ありがた迷惑の善意の押し付けが少数民族を追い詰める

188

第七章

日本人はなぜ中国に腹が立つのか

193

「階段型」で低下する対中好感度 194

中国に生まれたかった日本人 197

失望が蔑視に変わるまで 202

辛亥革命は理想の中国を取り戻せるか 205

腹立たしい中国のナショナリズム 208

「ヴァーチャル中国」を実現するための戦争？ 213

本当に「日中戦争を反省」するには 216

中国とどう付き合うべきか 219



ロシア

モンゴル

黒竜江省

吉林省

シリンホト

遼寧省

朝鮮
民主主義
人民
共和国

大韓
民国

内モンゴル自治区

北京市

天津市

河北省

山西省

山東省

寧夏回族自治区

陝西省

河南省

江蘇省

南京市

上海市

人民共和国

安徽省

湖北省

浙江省

重慶市

長沙

江西省

尖閣諸島

湖南省

貴州省

福建省

惠安県

台湾
(中華民國)

広西壮族自治区

広東省

アモイ

ラオス

ベトナム

海南省

香港
特別行政区

マカオ
特別行政区

フィリピン

西沙諸島



カザフスタン

ウルムチ

キルギス

新疆ウイグル自治区

甘肅省

パキスタン

青海省

中華人

チベット自治区

四川省

ラサ

ネパール

ブータン

インド

バングラ
デシュ

雲南省

ミャンマー

タイ

ラ

第一章 中国はなぜ『覇権主義』になったのか？

南シナ海波高し

中国外交は、二〇一〇年前後から急速に「攻め」の姿勢を強めています。二〇一一年一月の『ウォール・ストリート・ジャーナル』は、「中国の覇権主義、ASEAN共闘体制で対抗」と題した社説を掲載。「覇権主義」とはずいぶん強烈な言葉ですが、現在の日本でこの表現に違和感を持つ人は（私自身を含めて）ほとんどいないのではないのでしょうか。

本章では、中国の「覇権主義」の背景を考えていきます。特に最近の事件でいえば、今年（二〇一四年）の初夏に軍事衝突の寸前まで騒ぎがエスカレートした、ベトナムとの関係が象徴的です。

今年五月二六日、南シナ海の島嶼群「西沙諸島（パラセル諸島、ベトナム名「ホアンサ島地区」）の近海で、中国漁船の体当たりによってベトナム漁船が沈没する事件が起きました。

この事件はただの海難事故ではありません。背後に横たわる

在这只船只的一定数量派出不待



ベトナム巡視船による中国公船への衝突を伝える記事。中国外交部のウェブサイトより。
(http://www.mfa.gov.cn/mfa_chn/zy_xw_602251/t1165600.shtml)

のは、西沙諸島の実効支配をめぐる中国とベトナムの領土紛争。今回の衝突事件も、五月上旬に中国が西沙海域で海底油田のボーリング調査を開始し、ベトナム側を刺激したことが遠因と考えられています。現地の周辺では、以前から何度も、ベトナムと中国との間で民間船舶や漁業監視船の衝突・撃沈事件が多発してきました（たとえば二〇一三年三月二〇日にも、中国船によるベトナム漁船への砲撃事件が起きています）。

西沙諸島は、中国・台湾・ベトナムが領有権を主張していますが、ベトナム戦争末期の一九七四年に、中国が南ベトナム海軍を攻撃して全域を実効支配しました。同じく南シナ海にある南沙諸島や東沙諸島などと並び、尖閣問題の東南アジア版ともいえるべき係争地域となっています（もともと、中国から見れば東シナ海の尖閣海域についてはまだ手加減しているようで、彼らの「主戦場」は南シナ海の島嶼群に絞られているといいますが）。

中国がこうした島嶼群の領有にこだわる直接的な理由は、石

、勝了其他过任船只的航行安全。这种做法是对航行目田和安全的公然挑战。中万不得不不
域甚至更远的海域去打捞这些障碍物。



油をはじめとした地下資源や広大な排他的経済水域（EEZ）の獲得、将来的な太平洋海域への進出に向けた軍事面での橋頭堡の確保といったところが挙げられます。

しかしながら、こと領土問題に対する、傍目には異常に見えがちな中国の強硬姿勢の背後にあるのは、ソロバンを弾いて出てくる単純な利害問題だけではありません。

実利的な部分に関する解説は、すでに国内外のメディアでたくさんなされています。この本では別の視点から背景を考えていきましょう。

中国はなぜここまで領土にこだわるのか？

中国はなぜ露骨に覇権主義的な姿勢を取るのか？

これらの問題の背後にある、彼らの潜在意識の話です。

中華皇帝は全宇宙の支配者である

かつての中国は、領土問題に対して驚くほど寛容な国でした。

ウソではありません。少なくとも前近代の一九世紀までの中国は、この言葉がぴったりな国だったのです。もともと、過去にそうだったからこそ、その反動で現代の中国が領土

に対してここまでヒステリックなこだわりを見せるようになったとも言えます。

では、前近代の中国の領域認識とはどういうものだったのでしょうか？

あまり古い時代の話をしても仕方ないので、日本の江戸〜明治時代（つい最近ですね）とほぼ同時期に存在していた、清朝における興味深い事例をご紹介します。

一七二五年、清の雍正帝ようせいの時代、ベトナム国境の管轄担当者に雲南貴州うんなんきしゅう総督の高其倬こうきたくという官僚がいました。現代の日本でいえば長崎県知事（ただし地方自治ではなく中央による直接任命）くらいの立場の人です。

この人物があるとき「明朝が成立したころの国境では、雲南省の開化府（現在の雲南省文山市）に含まれていたはずの広大な土地や数十か所の村が、現在はベトナム側に占拠されています。ベトナム側は旧国境から五キロ以上も進出してきています。領土の回収を検討するべきではないでしょうか」と、奏摺そうしゆ制度を使って雍正帝に報告してきました。

この奏摺制度とは、清朝が整備した地方行政の報告制度です。わかりやすく言えば、全国各地に赴任中の官僚たちが、さまざまな問題についてレポートを書いてそれを密封、直属の上司である皇帝にダイレクトメールを送るシステムでした。メールを受け取った皇帝

は、「赤ペン先生」よろしく報告書の現物に赤い墨で指示や命令を書き込み（「硃批^{しゅひ}」といいます）、発信者に送り返します。

奏摺制度は特に雍正帝の時代に効果的に機能していました。ワーカホリック気味だった雍正帝は、一五年ほどの統治の間、ずっとメールを手ずから開封して指示を書き込んでいたとされます。すなわち彼の「赤ペン」は、当時の中国の国家的意志をそのまま体現する非常に貴重な史料というわけです（ちなみに、この制度は皇帝の負担が大きすぎることもあり、雍正帝の死後は徐々に形骸化。とはいえ清朝の末期まで続きました）。

ともかく、一七二五年に雲南省の現場から先のようなメールが来たわけです。ここで雍正帝は、「赤ペン」に何を書いたか？ 仮に現在の中華人民共和国が同じ事態に直面すれば、外交部（外務省）のスポークスマンが鬼瓦のような形相でベトナムに強硬な抗議（恫喝ともいいます）をすることでしょう。状況によっては「国境警備担当の人民武装警察に実力で土地を回収させよ」くらいの指示が出てもおかしくありません。

しかし、雍正帝の意見は違っていました。彼はこう言うわけです。



清王朝は多くの名君を輩出したが、その中でも雍正帝（在位1722-1735年）は勤勉で知られる皇帝であった。「赤ペン先生」を貫徹したために、睡眠時間は四時間程度だったという。

「其の地果たして利有るや、則ち天朝てんちやうあ豈に小邦しょうほうと利を争うべけんや」

〔意識〕

くだんの係争地に何か利益があるとしても、全宇宙の中心たるわが大清帝国がベトナムのごとき小国を相手にギラギラするべきではないぞよ。

「如も利無きや。則ち又何ぞ必ず争わんや」

〔意識〕

仮に何の利益もない土地であるならば、一層のことなぜ争わねばならぬのだ（そのくらしいの土地はベトナムにくれてやりなさい）。

「朕心ちんを居せくに惟ただ至公至正を以てす。中外を皆赤子せきしと視る」

〔意識〕

朕は公平かつ正義の心を持つ君主なのである。中国も外国も、全宇

治天下之道以分彊與柔遠較則柔遠為尤重而柔遠之道以畏威與懷德較則懷德為尤重撥奏都帝南丹等處在明季已以為安南國所有非伊敢侵佔於我朝時也安南國我朝累世恭順深為可嘉方當獎勵何必與爭明季火之區區彈丸之地乎且其地如果有利則天朝豈與小邦爭利如無利則何必爭矣朕居心惟以至

宙のあまねく民はわが赤子も同然の臣民である（ゆえに、くだらないことでケンカせぬように）。

……よくも悪くも、大中華帝国の極盛期

を築いた皇帝の貫禄を漂わせた意見です。

理念上、中華皇帝は全宇宙の支配者で、全世界のあらゆる土地と人民はすべて皇帝のもの。中国とその他の地域との違いは、「皇帝の直轄下にある土地か否か」くらいしかありません。ゆえに「放っておきなさい」というわけです。

これを大国の寛容さとするか、中華思想の権化のような尊大な姿勢とするかは判断が分かれそうです。しかし、前近代の中国の領域概念を想像させるには十分なエピソードです。

（ちなみに、清朝は一六八九年にはロシア帝国を相手に満洲北方の国境線を定めた「ネルチンスク条約」を結び、こちらではロシアと清を対等な関係として条約締結をおこなっています。ただ、この際も清朝は自国内ではロシアを朝貢国の一種だとみなしており、やはり「本来は皇帝の領域

公至正視中外皆赤子况兩地接壤最宜
善處以安靜懷集之非徒安彼民亦所以
安吾民也即以小溪為界其何俾乎貪利
倖功之舉皆不可汝知朕此意斟酌為之

であるシベリアにロシア人が住むことくらいは許可してやる」といった主観的認識を持っていたことは、おそらく間違いないと思われれます。

中国は有史以来、一八世紀の末ごろまでの数千年間、極端な内戦期を除けば文化と経済において常に世界の先進国でした。

特に極盛期の清朝の羽振りのよさは凄まじく、領土問題に対してここまで寛容な姿勢をとれたのも、彼らが世界で独り勝ちをする大国だったからにはほかなりません（どのくらい先進国だったかと言えば、ヴォルテールらの一八世紀ヨーロッパの啓蒙主義思想家が、中国の儒教や官僚体制の優秀性を賛美する言説を残すくらい凄かったです）。

しかし、中国という恐竜は、前近代に過適応した「勝ち組」だったがゆえに、近代への適応に失敗しました。

ことに領域や国家主権に関する概念でいえば、先の雍正帝のようなユルい意識を一九世紀の帝国主義の時代まで持ち続けたことが、中国の近現代史を地獄の底へ突き落とす事態を引き起こしていきます。

すなわち、清朝は近代ののイギリスやフランス・ロシア・日本などの列強諸国に対して

も、往年と変わらない姿勢で接してしまったのです。

『閩金ウシジマくん』状態へのトラウマ

失敗の皮切りが、一八四〇年のアヘン戦争と、やがて結ばれた南京条約です。

後世、中国にとっての「西洋の衝撃」、ウエスタン・インパクトと呼ばれる出来事でした。

近代兵器を駆使してアヘン戦争に勝利したイギリスが要求したのは、香港島の割譲。お

よび、広州（カントン）一港だけが対西洋窓口になっていた清朝の管理貿易体制を廃止さ

せ、広州以外にも厦門^{アモイ}や上海^{シャンハイ}など計五港の開港と

領事駐在、賠償金の支払い、中英両国の対等交渉

などを求めたのでした。

さらに数年内にフランスやアメリカとも条約が

結ばれ、清朝は各国の領事裁判権（事実上の治外法

権）の容認という不平等条約を吞まされていくこ

とになります。



広東省東莞市虎門鎮にある、アヘン戦争で使用された要塞。
(2001年筆者撮影)

これは現在の国際社会の常識に照らして考えれば、実に由々しき事態です。

何と言つても、国土・経済・司法への主権侵害を許す行為。ところが、当時の清朝は「全宇宙の支配者である中華皇帝が、イギリスと『対等』な関係を築くのは屈辱だ」といった不満を抱いただけで、国家主権の侵害についてはそれが問題であるとすら認識していなかったきらいがあります。

ちよつと乱暴に言えば、「中国は大きいので、南方のよくわからない島（＝香港島）くらいはあげてもよい」「欲深い外夷（中華の徳を知らない野蛮人）どもが利益を欲しがっている、わが大清帝国からの恩恵として特別にくれてやろう」ぐらいの認識だったわけです。もちろん、当時にも魏源ぎげんという頭のいい人がいて、西洋の恐ろしさを懸念して『海国図志』という世界情勢ガイドブックを書いているのですが、彼の問題意識は同時代の清朝の朝廷ではほとんど共有されませんでした。

（余談ながら、魏源の『海国図志』はむしろ中国よりも幕末の日本で重宝され、吉田松陰しやういんや佐久間象山しやうざん、島津斉彬しまづなりあきららに大きな影響を与えました）。



ともかく、清朝は西洋発祥の新しい国際ゲームのルールをよく理解しないまま、領土や国家経済の一部を外国の好きにさせてしまったのです。

帝国主義時代は欲望の時代です。これを見た列強諸国は、当然ながら「もつと揺さぶれば、さらに大きな利益を獲得できる」と考えるようになります。

結果、清朝はアロー戦争（第二次アヘン戦争）に直面し、さらに各地に列強の租界（特権居留地）を作られ、沿海州の対口割譲とロシアの満洲進出を認めさせられ、清仏戦争と日清戦争に負け……と、最悪の負け組プロセスを転がり落ちます。結果、清朝の朝貢国だった琉球や朝鮮・ベトナムも、それぞれ日本やフランスに奪われます。

また中国国内も、自国に不利な貿易体制のもとで社会経済の混乱が進みます。一九世紀の末ごろには列強の勢力範囲が国内の各地方で複雑に入り組んで（中国語で「瓜分」^{グワフン}と言います）、取り返しがつかない状態になりました。

孫文が言うところの「半植民地化」です。

社会の仕組みの恐ろしさを知らないまま、周囲の雰囲気流されてポンポンとハンコを

1898年にフランスの『Le Petit Journal』に掲載された、「瓜分される中国」を描いた風刺画。「中国」と書かれたパイの切り分け方を、中国人の抗議をよそに女王（英）・カイザー（独）・ツァーリ（露）・自由の女神（仏）・サムライ（日）たちが相談している。

押すうちに、にっちもさっちもいなくなつた
。

私たちの生活で言えば、利子や契約の概念をあまり理解していない人が、何も考えずにクレジツトカードのリボ払いやサラ金からの借金を繰り返して、気づいたときには生活が破綻。借金取りのヤクザに捕まって山奥の工事現場のタコ部屋に放り込まれ、もう逃げられない。そんな状態に相当します（ノワール漫画の『闇金ウシジマくん』（小学館）や『カイジ』シリーズ（講談社）の登場人物みににされてしまったわけですね）。

この清朝末期のツケは非常に大きく、中国はその後も一〇〇年以上にわたり『ウシジマくん』状態に苦しみます。この時に痛感した国際社会の理不尽さに対する憤怒と憎悪は、中国人の心の中からはなかなか消えませんでした。



いじめられっこ意識で国家形成

近代中国の歴史は、こうして幕を開けました。

かつて孫文が「中華の恢復」を叫んで創立した中国同盟会も、その後輩筋である中国国民党も、どん底状態にある中国を変えたいという動機から結成されています。もちろん、国民党と「兄弟党」と言われる中国共産党も同様でした。

中国のナショナリズムは、世界最高の先進国だった自国が侵略され、一方的な力の論理でグローバル・スタンダードに乗せられているいろいろなものを騙し取られた屈辱に対する、後悔と憤りから生まれてきたと言えます。

「敵」の存在を理由にナショナリズムが形成され、それが強化されるのは、日本をはじめとして世界的に見られる現象です。しかし中国の場合、もともとが立派だったのに、近代に入って世界



中華民国の公的イデオロギーでは「国父」と位置付けられている孫文。写真は2014年春の台湾学生運動の際に、中華民国立法院（国会議事堂）内部で筆者が撮影したもの。

中の国家——欧・米・日の列強諸国からヤク漬けと借金漬けにされてぶん殴られ続けたことで、ナショナリズムのなかに強烈な被害者意識が（他国と比べてもかなり明確に）組み込まれています。

今後再び、全世界が悪意を持って結託し、中国を陥れるための陰謀をこらすのではないか？ そんな警戒心も、やはり強固に存在します。

ゆえに、一九四九年に建国された中華人民共和国、自国の体制や主権の維持にかかわるような国際問題に直面するたびに、自分たちを「被害者」と位置付けて内外にアピールするような行為を好むようになりました。

中国が朝鮮戦争や中ソ対立でアメリカやソ連と衝突した際にも、こうした論理に基づく抵抗の主張がしばしばなされました。

中国は一九五〇年代末から、同じく過去に『ウシジマくん』状態を経験した大国・インドとも武力衝突を伴う激しい国境紛争を起こしました、このときも「背後でソ連が糸を引いている」「弱い中国がまたやられている」という理屈を持ち出し、被害者の論理をかりかして押し通すことができました。

もつとも、当時はアメリカやソ連のほうが中国よりも強く横暴なのは誰の目にも明らか

かだったため、この主張自体への違和感は内外であまり持たれなかつたようです。(むしろ、この時期の日本国内の進歩的文化人や一部のメディアは、中国のこの主張に熱烈なエールを送っていたくらいです)。

問題は、中国がその後になっても「いじめられっこ意識」を持ち続けたことです。

二一世紀に入る前後から、中国は決して「弱い国」ではなくなりました。それにもかかわらず、以前の被害者意識や警戒心が継続しているのです。

しかも一九九〇年代の江沢民政権以来、中国共産党は従来の社会主義イデオロギーや毛沢東思想はもはや時代遅れになったとみて、「中華民族」の愛国主義(中華ナショナリズム)を国民統合のツールとして政権の延命を図るべく、盛んに宣伝をおこなうようになりました。また、二〇〇八年のリーマンショックの際に中国経済がいち早く立ち直ったことで、政権も国民も「大国」としての自身を深めはじめました。

前述のように、中国のナショナリズムは『ウシジマくん』状態へのトラウマから生まれています。

結果、現代の中国は、自国の「大国」意識を内外に示したがる一方で、内向きにはいじ

められっこの意識の拡大再生産を続けるという、非常にいびつな状態になってしまいました。人間にたとえれば、凶体がでかくてカネも社会的地位も持つようになった大人が、普段は自信満々で傲慢な言動を繰り返しているのに、心の中では過去に受けたイジメに対する屈折した被害者意識と警戒心を持ち続けているようなものです。非常に面倒くさい人になってしまったわけですね。

近年、中国は周辺国に対して明らかに「覇権主義」的な姿勢を打ち出しています。しかし、彼らが領土問題をめぐって自国を正当化する際には、相変わらずいじめられっこの論理を持ち出され続けています。

たとえば今回のベトナムとの対立でも、中国外交部の報道官は「中国の公務船は五月二七日以降、延べ二〇〇回以上（ベトナム側から）衝突されている」「ベトナムの一部メディアが嘘をでっち上げて騒ぎ立てているのは、魂胆があつてのことだ」と、自分たちこそが被害者で陰謀に巻き込まれているのだ、と主張し続けています。

「俺たちはもういじめられたくない。これは自衛だ」と言いつつ、実際の行動は大国意識を振りかざした力の論理での勢力拡張。ゆえに、中国の「覇権主義」はいっそう困りもの

なのです。

さらに困った話があります。

現在の中国政府の一部——特に外交や経済分野を担当している官僚たちは、日本以上のエリート集団ぞろいであるだけに、この「いじめられっこの論理」がすでに「ほんとうのこと」ではなくなった現実を把握しています。

彼らは領土問題に対しても、損得勘定のソロバンを弾いた上で慎重な対処を望む傾向が強いです。日本やベトナムを相手に強硬な言辞を繰り返す外交部の報道官たちも、彼ら自身は自分が喋っているロジックのアホらしさを認識しており、「お仕事」として役割をこなしていると思われまます。

しかし、中国のタカ派の政治家や軍人・少なからぬ一般大衆などは、公教育を通じてこの論理が潜在意識に刷り込まれており、「本気」で信じています。また、論理の真偽を検証しようとして、冷静に思考を深める行為もあまりおこなっていないでしょう。

（われわれ日本人も、現代の日本が「第二次大戦の敗戦で生まれ変わった自由な民主主義国」であると、小中学生のころから「なんとなく」信じています。それをマジメに検証しようと考え

人もおそらく少数派です。国家による国民への教育——国家の神話やイデオロギーの刷り込みとは、そういうものだったりするのです。

だからこそ、中国の一部には、領土問題に対して実利的な理由以上に強硬な意見を掲げる人たちがおり、政府の政策や軍事行動にもそれが多少なりとも反映されています。中国に限った話ではありませんが、現実主義的なハト派はタカ派からの売国奴扱いを受けやすく、彼らの意見はかき消されがちな傾向もあります。

こうした国内事情が、近年の中国の領土問題の先鋭化に影響しているのです。

「自衛のために」で日本を侵略？

もともと、中国が被害者意識ばかりで対外的な野心がゼロかといえ、決してそうではありません。特に中国海軍は、中国の勢力範囲を拡張する意志を明確に持っている——少なくとも、第三者からそう解釈されがちな行動を盛んにとっています。

中国にとって最大の仮想敵国はアメリカ（及びその軍事的パートナーである日本）です。

太平洋上に第一防衛線、第二防衛線を構築し、その範囲内を自分たちの勢力範囲として

いくというのが、中国海軍の軍事ドクトリンです。第一防衛線の内部は、日本列島から台湾を通ってフィリピンへと伸びるラインの内側、第二防衛線の内部はハワイまでの太平洋海域であるとされています。

当然ながら、これが実現すると、日本を含めた西太平洋の各国は中国の勢力範囲内に組み込まれます。

もちろん、日本も台湾もフィリピンも、アメリカの傘下から中国の傘下に移る事態はできれば遠慮したいところです。ゆえに、中国がこの構想を本気で現実化するならば、これらの前線国に対して（経済面を含む）「侵略」をおこなう必要が出てきます。

——古来、自衛と侵略は紙一重です。

戦前の日本による朝鮮や満洲への進出も、「侵略」である一方で「自衛」としてやむを得ない部分が明らかになりました（もつとも、攻めてこられる側はいい面の皮ですが）。

しかし、二〇世紀前半の日本が直面したロシア（ソ連）などの列強諸国の脅威と、現代の中国にとってのアメリカや日本の脅威は、果たして同じくらい深刻なのでしょうか？
全くそうではないのは明らかでしょう。当面、アメリカや日本が中国を植民地化するた

めに積極的に戦争を仕掛けるような可能性は非常に低いからです。そもそも、ろくな理由もなく外国に攻め込んで、自国の権益を拡大していくという価値観自体が、一九世紀の遺物的な古い考え方でしかありません。

しかし、近年の中国はこの「古い考え方」に、二一世紀のご時世になって急速に傾倒しつつあるように見えます。

中国の「覇権主義」は日本よりも二二〇年遅れてやって来た？

最後に、ちょっと世界の歴史を考えてみたいと思います。

一九世紀から二〇世紀前半までの世界史は、新興国家が数十年間の拡大の過程で覇権主義（帝国主義）的になっていく——という一定のパターンを各国がなぞる歴史でした。イギリス・フランス・アメリカ・ロシア、さらにドイツやイタリア、もちろんわが日本もそうです。

しかし、中国はこの帝国主義時代を『ウシジマくん』状態で過ごし、自国のありかたを主体的に決定することができませんでした。また、中華人民共和国が建国された後も、毛

沢東時代の混乱などで、竹のカーテンに閉ざされた「空白の現代」が長く続きました。

新興国家としての中国の歴史は、一九八〇年代から始まっています。

どうやら中国は、過去のドイツや日本から一二〇年ほどズレて、現代になりようやく新興国としての覇権主義の段階に到達したのではないか——？

私はどうしても、そんなことを考えてしまいます。

ちよつと前の二〇〇六年のことですが、国营放送のCCTV（中国中央電視台）が『大国崛起』という連続ドキュメンタリー番組を制作・放映して、話題を集めました。

この番組は、大航海時代のポルトガルやスペイン・オランダのほか、一九世紀にいわゆる帝国主義列強に名を連ねていた欧・米・日の各国の発展の経緯を説明する内容です。戦前の日本の歴史についても、比較的客観的な説明がなされていたことから、日本でも中国ウォッチャーの間では驚きを込めて受け取られました。

CCTVというテレビ局は、中国政府と共産党のプロパガンダメディアの代表選手です。彼らがわざわざ、北京五輪の二年前の時点で他の大国の成功プロセスを詳しく紹介する番組を作ったのは、「中国もこれらの国に伍していくべきだ」というメッセージを国民に宣

伝する意図ゆえだったと考えた方がいいでしょう。

もちろん、中国が経済や社会の成熟度において「大国崛起」して、先進国のレベルに伍していくことは、かの国の一般庶民の幸せのためにも喜ぶべき話です。

しかし、彼らが過去の「大国」たちが覇権主義・帝国主義化したプロセスまでコピーしていくとすれば、まったく笑えない事態でしょう。

——二二世紀の現代は、「新帝国主義」的な国際関係が構築されつつある時代に投入しつつあるとも指摘されています（佐藤優『新・帝国主義の時代』など）。

往年の列強各国（特にロシアが代表的です）が、二度目の帝国主義を迎えつつある二〇一四年。これに、国際政治の競技場のレーンを周回遅れで走っていた中国の、「はじめての帝国主義」の時代がバッティングしているのが現代だという考え方もできるのです。

もともと「帝国主義」とは、一九世紀後半の列強諸国による、他の民族や国家を侵略して自国の勢力を拡大する外交姿勢を「非難」する文脈のなかで用いられた言葉でした。

レーニンは、帝国主義の国々がお互いに侵略しあって自滅することで、資本主義社会は

終わりを告げて社会主義に取って代わられると主張しています。

中国共産党は現在でも、公式見解上ではマルクス・レーニン主義を放棄していません。レーニンの後継者を自認する者たちが支配する国家が、暴力的な資本主義と帝国主義の論理に身を沈めている現状は、実に皮肉きわまりない話です。

しかし、これこそが現在の世界（と日本）が直面している現実なのです。

漫画

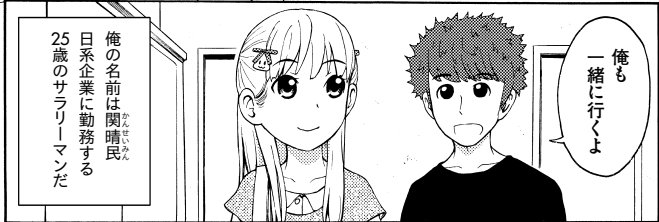
中国のヤバくない日常

孫向文

孫向文（そん・こうぶん）
浙江省出身の中国人漫画家。学生時代から日本の漫画・アニメ・ゲームなどポップカルチャーにハマリ、日本での漫画家生活を志して単身来日。2013年に初単行本『中国のヤバい正体』（大洋図書）を刊行、2014年10月には第2弾『中国のもっとヤバい正体』が刊行される。夢はラブコメ漫画家になること。



中国 上海





南沙諸島も
ちゃんと
揃ってるな

最近周りの国が中国に
ケンカを吹っかけてくるよね
領土を失わないように
頑張らないと…

中国メディアを
うのみにする
一般的な中国人の
考え方です

野蛮なのはいつも外国
中国は固有の領土を
守ろうとしているだけ
だと思ってるのです

なあ 伶俐は中国の
領土の範囲って
どこまでだと思う？

中国には五千年の
歴史があつて
領土は時代によって
変わるよね

でもいまの中国の
範囲って先祖様が
命がけで中華民族を
統一した結果だから…

「中華民族」とは
孫文が発明した概念だ
現代では漢民族による
他の民族への実質的な
同化・吸収行為が
「中華民族の団結」という
言葉で美化されてしまう
ことが多い

うーん

共産党がこの概念を強
調するようになったのは
一九九〇年代に江沢
民政権が愛国主義教育
を強化してからだ
その影響はノー天気な
伶俐にすら及んでいる

琉球王国も中国の
属国だったけど
いまは日本の沖縄だよ
沖縄の住民って
中華民族だと思う？

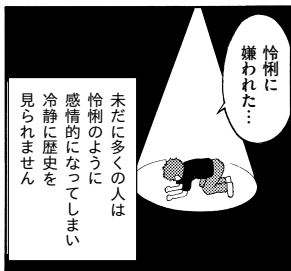
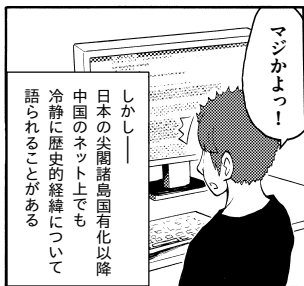
えっ？
沖縄はずっと
日本じゃないの？

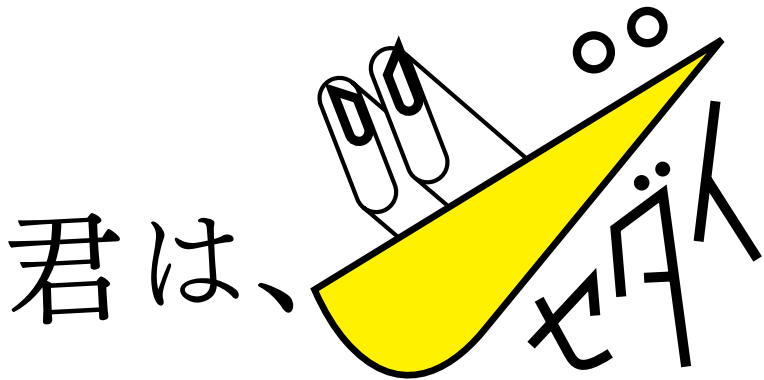
一般の中国人にとって
中華民族・中華思想・
領土意識はあまり明確に
定義されておらず
政府の発表どおり
尖閣諸島や台湾も
「中国領」だと考えている

琉球は中国領だ！

もっと歴史を勉強しろ！
核を使っても
日本鬼子から取り返す！

びっくり





君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ イベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!